

貧書生

内田魯庵

青空文庫

「やい亀井、何しおる？ 何ぢや、懸賞小説ぢや——ふッふッ、」と宛も馬鹿にしたやうに冷笑つたはズングリと肥つた二十四五の鬚々の書生で、垢染みて膩光りのする綿の喰出した襦袢に纏まつてゴロリと肱枕をしつゝ、板のやうな掛蒲団を衾の上に被つて秃筆を噛みつゝ原稿紙に對ふ日に焼けて銅色をしたる頬の瘦れて顴骨の高く現れた神経質らしい全じ年輩の男を冷やかに見て、「汝も懸賞小説なんぞと吝な所為をするない。三文小説家になつて奈何する氣ぢや。」

「先ア黙つてろよ。」と亀井と呼ばれた男は顧盼つて較や得意らしき微笑を浮べつ、「之でも懸賞小説の方ぢやア亀之屋万年と云つて鑑定証の付いた新進作家だ。今度選つたら君が一夜の愉快費位は寄附する。」

「はッはッ、減らず口を叩きくさる。汝の懸賞小説も久しいもんぢや。一度当選つたといふ事ぢやが、俺と交際つてからは猶だ当選らんぞ。第一小説が上手になつたら奈何するのぢや。文士ぢやの詩人ぢやの大家ぢやの云ふが女の生れ損ひぢや、幫間の成り損ひぢや、芸人の出来損ひぢや。苟くも氣骨のある丈夫の風上に置くもんぢやないぞ。汝も尚だ隠居して腐つて了ふ齡ぢやなし。王侯将相何ぞ種あらんや。平民から一躍して大臣の印綬

を握^{つか}む事の出来る今日ぢやぞ。なア亀井、筆なんぞは折つペしッて焼いて了へ。恋ぢやの人情ぢやのと腐つた女郎の言草は止めて了つて、平凡^{へいぼ}小説を捻^{ひま}くる間に少^{ちつ}と政治運動をやつて見い。」

「はッはッ、僕は太に君と説^{ちが}が異^{ちが}う。君は小説を能^よく知らんから一と口に戯作と言消して了うが、小説は科学と共に併行して人生の運命を……」

「措^おいて呉れ、措^おいて呉れ、小説の講釈は聞飽きた、」と肱枕の書生は大欠伸^{あくび}をしつゝ上^う目^めで昵^{じつ}と瞻^{みつ}めつ、「第一、汝、美が如何^{どう}ぢやの人生が如何ぢやのと墮落坊主の説教染みた事を言ひくさるが一向^{ぜに}銭にならんぢやないか？」

「今度は当選る、」と懸賞小説家は得意な微笑を口^{くちもと}辺に湛^みへつ断乎たる語気で、「三月^{みつぎ}以来^{このかた}思想を鍊上げたのだから確に当選る。之が当選らぬといふ理由は無い……」

「汝は自慢ばかりしおるが一度も当選つた事は無いぞ。併し当選つた処で奈何する、一年に二度や三度、十円や十五円の懸賞小説が取れたツて飯は食へんぞ。」

「勿論僕は筆で飯を喰ふ考は無い。」

「筆で飯を喰ふ考は無い？ ふウむ、夫^{それ}ぢやア汝は一生涯新聞配達をする氣か。跣^{はだし}足で号外を飛んで売つた処で一夜の豪遊^{たし}の足にならぬワ。」

「僕は豪遊なんぞしたくない。斯うして新聞配達をしながら傍ら文学を研究してゐるが、志す所は一生に一度不朽の大作を残したいのだ。飯喰の種は新聞配達でも人力車夫でも立ちん坊でも何でも厭はないのだ。」

「吝な野郎ぢやナ。一生に一度の大作を残して書籍館に御厄介を掛けて奈何する氣ぢや。五体満足な男一匹が女や腰拔の所為をして筆屋の御奉公をして腐れ死をしてゐつては国家に対する義務が済むまい。なッ亀井。俺の忠告に従つて文学三昧も好い加減に止めにして政治運動をやつて見い。奈何ぢや、牛飼君の許から大に我々有為の青年の士を養うと云ふて遣したが、汝、行つて見る氣は無いか。牛飼君は士を待するの道を知りおる。殊に今度の次の内閣には國務大臣にならるゝ筈ぢやから牛飼君の客となるは將に大いに驥足を伸ぶべき道ぢや。」

「僕は政治家は嫌ひぢや。」

「なにッ、政治家は嫌ひぢや、」と呆れたやうに眼を睜つて、「汝は能くゝな腰抜けぢやナ。天下の権を握つて四海に号令するは男子の大愉快ぢやないか……」

「それはナ天下の権を握つたら愉快だらうが、」と懸賞小説家は流盼に冷笑しつ。「君等のやうな壮士の仲間入りは感服しないナ。」

「何ぢや、失敬な事吐かす、」と肱枕君は勃と起直りて故とらしく拳を固め、「伊勢武熊は壮士の腐つたのぢやないぞ。青年団体の牛耳を握りおる当今の国士ぢや、」と言掛けたが俄に張合抜けしたやうに拳を緩めて、「そぢやが汝のやうな腰抜には我々燕趙悲歌の士の心事が解りおるまい。斯うして汝等と同じ安泊に煤ぶりおるが、伊勢武熊は牛飼君の股肱ぢやぞ。牛飼君が内閣を組織した暁は伊勢武熊も一足飛に青雲に攀ぢて駟馬に鞭つ事が出来る身ぢや。白竜魚服すれば予且に苦めらる。暫らく、志を得ないで汝のやうな小説家志願の新聞配達と膝組で交際ひおるが……」

「ふッふッふッ。」

「何笑ひおる、」と伊勢武熊は真摯に力味返つて、「功名咄をするやうぢやがナ、此のぜん前牛飼君が内閣の椅子を占められた時、警部長の内命を受けたが、大丈夫豈田舎侍を甘んぜんや。己は首を掉つて受けなかつた。牛飼君も大いに心配してナ、それから警保局長ならと略ぼ相談が纏まつた処が、内閣は俄然瓦解しおつた……」

「呀くッ！」

「機一髪を仕損じたが、区々たる俗吏は丈夫の望む処で無い。官を棄つる事弊履の如しで……」

「尚だ官に就かんのぢやないか。」

「能く交ぜ返す奴ぢや。小説家志願だけに口の減らぬ男ぢやナ。併し汝が瘡肱を張つて力んでも小説家ぢやア銭が儲からんぞ。」

「政治家でも銭が儲からんぞ。」

「馬鹿を云へ。衆議院議員は追付け歳費三千円になる、大臣の年俸は一万二千元になる筈ぢや。」

「其時は小説の原稿料が一部一万円位になる。」

「懸賞小説は矢張十円ぢやらう。」

「壮士の日当は一円だ。」

「はッはッはッ、新聞配達が何云ひくさる……」

「ごろつき壮士が……。」

「何ぢやと……。」

と鉄拳将に飛ばんとする時、隅の方に踰まつた抱巻がムクくと持上つて、面長な薄髯の生へた愛嬌のある顔が大欠伸をした。

「両君、相変らず詰らない喧嘩をしますナ……」

と伸のびをした手で腕うでを撫なりながら、「錢が儲かるの儲からんのと政治家や文学者を気取る先生方が俗な事を仰おつしやる。錢が儲けたいなら僕の所為まねをし給へ。君達は理窟を云ふが失敬ながら猶だ社会を知つておらんやうだ。先ア僕の説を聞給へ。斯う見えて僕は故郷くにに在あた時分は秀才と云はれて度々新聞雑誌に投書をして褒美を貰つた事もある。四五年前の雑誌を見給へ、駿州有渡郡田子の浦うら在駿河不二郎の名がチヨク／＼見えるよ。それだから故郷を出る時は矢張人並に学若し成らずんば死すとも歸らずと力んだが、さア東京へ来て見ると迎むかへも満足な學費が無くては碌な學問は出来ない。新聞や牛乳の配達をして相間あひまに勉強しやうてのは、（亀井君は現にやつておるが）、実は中々忙がしくて、片手間の勉強で成効しやうてのは百年黄河の澄むを待やうなもんだ。所で僕は発身ほつしんして商人と宗旨を換え、初めは資本もとが無いから河渌もろひの人足に傭はれた事もある。点灯会社に住込んで脚達きゃだちを担かついで飛んだ事もある、一杯五厘のアイスクリームを売つた事もある。西瓜の切売をした事もある、とゞの結局が縁日商人となつて九星独判断、英語独稽古から初めて此頃では瞞まやかし着の化粧品と小間物を売つてマゴ／＼しておるが君、金を儲けるのは商人だよ。殊に縁日商人位泡沫錢あぶくの儲かる者は無い。僅か二両か三両の資本もとで十兩位浮く事がある。尤も雨降のアブレもある。品物のロウズも出るから儲かるほどに金は残らんが、なにしろ

独立の商人でお客様の外は頭を下げずに太平楽を云つて、定^{きま}つた給金と違つて不意^{まうけ}の所得
 の入る処が面白い。君だから内幕を話すが二銭に三箇^{みつ}の石^{シヤボン} 鹼ナ。あれは一百^{いつそく}一貫の品
 だ。一と晩に一百売ると五貫余儲かる、夏向になると二百や三百は瞬く間に売れる。一番
 高い六銭の石^と 鹼ナ、あれは一グロス二両と四貫だ。あの品が駄裁^{おつ}が妙に出来てるんで素
 人が惚^と込んで三ダースや四ダースは直ぐ売れる。それから齒磨ナ、あれはココ」に傍点
 「になつてる齒磨^{ます}を升で買つて来て 竜^{りゆうなう} 腦^{ちつ}を些とばかり交ぜて箱詰にして一と晩置くと
 プンと好い香がする、そいつをオンタケ散とか豚印とか好い加減な名を付けた袋へ入れて
 一と袋一銭五厘に売るんだ。奈何だい、商人の楽屋は驚いたもんだらう。尤も僕の商売は
 夏向で冬は閑な方だが、こゝ君達に一つ秘策を授けやうかな。懸賞小説を書いたり政治家
 の尻馬に乗るより余^{よつぽど}程氣樂に儲けることが出来る。斯ういふ商売だ。牛込や神田には向
 かんが本所、下谷、小石川の場末、千^{せんじゆ}住、板橋^{あたり}辺で滅法売れる、肝^{ひや}あかぎれ霜^{しもやけ}傷の妙
 藥鶴の脂、臘^{おつとせい} 臍^みの脂、此奴^{こいつ}が馬鹿に儲かるんだ。なアに鶴や臘^{まぐら} 臍^{あぶらみ}が滅多に取れるも
 のか。豚の脂や仙台鮪^{まぐら}の脂肪肉で好いのだ。脂でさへあれば肝^{あきなひ}あかぎれには確に効く。此
 奴^{ひとかひ}を一貝一銭に売るんだが二貫か三貫^{もと}か資本で一晩二両三両の商^{あきなひ} 売になる。詐偽も糞
 もあるもんか。商人は儲けさへすりやア些と位人に迷惑を掛けても関^{かま}はんのだ。今の大^{あほあ}

頭株たまかぶを見給へ、紳商面をして澄ましてやがるが、成立なりたちは悉皆みんな僕等と全じ事だ。今でも猶だ其根性が失せないから大きな詐偽ばくちや賭博いかさまの欺瞞あつげをやつて実業家だと仰しやいますワ……」と滔々たうくと縁日の口上口調で饒舌しゃべり立てる大氣焰に政治家君も文学者君も呆氣あつげに取られて眼ばかりパチクリさせてゐた。処へ案内もなく障子をガラリと開けて、方面無はうめんむ髻げんの毬栗いがぐり頭がぬうツと顔を出した。

「やア、片岡、奈何どちじやい？」と政治家は第一に口を切つた。

「ふうむ、」と得意らしく小鼻を揺めかしながら毬栗頭はは褪はげチヨロケた黒木綿の紋付羽織をリウとしごいて無図むづと座つた。

「首尾よく落第かナ？」

「勿論及第しおつた、」と毬栗君は大得意で有つた。

「君、及第しましたか？」と新聞配達の小説家は眼を睜つた。

「諸君、最もう馬鹿にし給ふな、片岡禪吉は最早托鉢坊主ぢやないよ、明日辞令を請取うけとれば台湾総督府の巡查片岡禪吉ぢや。大いに新領土の経営をして日本国家に報ゆる覚悟ぢや。」
「壮快々々。一番片岡君の為め祝宴を開いて万歳まんざいを称へやう、」と伊勢武熊は傲然として命令するやうに、「そこで会場は横町の牛店として駿河君は実業家ぢやから会費の半分

を負擔し、亀井君は懸賞小説が當選さうぢやから登用人材の片岡君と共に残る半額を負擔すべし。処で俺は當分志を得んから諸君の御馳走になるのぢや。あッはッはッ……。」

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆85 貧」作品社

1989（平成元）年11月25日第1刷発行

1991（平成3）年9月1日第3刷発行

底本の親本：「社会・百面相」岩波文庫、岩波書店

1953（昭和28）年2月

入力：渡邊 つよし

校正：門田 裕志

2001年9月20日公開

2006年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貧書生

内田魯庵

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>